# 古典文法トレーニング　長文課題　品詞分解と現代語訳

大問十六（出典：『沙石集』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

昔、愚かなる俗ありて、人の聟になりて往きぬ。さまざまもてなしけれども、なま小賢しく由ばみて、いと物も食はで、飢ゑて覚えけるままに、妻があからさまに立ち出でたる隙に、米を一類うちくくみ食はむとするところに、妻帰りたりければ、恥づかしさに顔をうち赤らめて居たり。頬の腫れて見えければ、「いかに」と問へども声もせず、いよいよ顔赤みたれば、「腫れものの大事にて物も言はぬにや」とて、驚きて、父母に「かく」と言へば、父母来たり（※1）て見て、「いかにいかに」と言ふ。いよいよ色も赤くなるを見、隣の者集まりて、「聟殿の腫れもの、大事におはすなる。あさまし」とてとぶらふ。さるほどに、医師を呼ぶべきにて、藪医師の、近々にありけるを呼びて見すれば、「ゆゆしき御大事のものなり。とくとく療治し参らせむ」とて、火針を赤く焼きて、頬を通したれば、米のほろほろとこぼれに（※2）けり。

※1：カ行変格活用「来」＋完了存続の助動詞「たり」と解釈しても文脈上は大して支障はないが、「来ている」「来てしまった」とするよりは単純に「来る」と訳せるほうが自然だと判断し、一語の動詞「来たる」を採用した。

※2：サイトやテキストなど複数の媒体で確認したが、どれも「こぼれてけり」と表記されていた。

◎現代語訳（→『ステップアップノート30　古典文法トレーニング』参照）